

英語コーパス学会 Newsletter No. 60

Mar. 1, 2008

■会長: 中村 純作
■事務局: 〒175-8571 東京都板橋区高島平 1-9-1 大東文化大学 山崎俊次研究室内
■TEL: 03-5399-7372 ■郵便振替口座: 00940-5-250586 (英語コーパス学会)
■URL: <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html> ■E-mail: yamazaki@ic.daito.ac.jp

JAECS
Japan Association for English Corpus Studies

会長退任のご挨拶

立命館大学大学院言語教育情報研究科 中村 純作

この3月をもって任期満了で会長職を退任させていただきます。2004年4月に前会長の今井光規先生から引き継ぎ2期4年間、非力な小生がこのような重職を全うできましたのも、ひとえに事務局の方々、運営委員の先生方、会員の皆様のご協力によるものと心より感謝しております。まことに有難うございました。

初代会長の齊藤俊雄先生から英語コーパス研究会の立ち上げに御誘いを受けたのは1992年のことでしたので、あっという間に15年が過ぎた思いがしております。その間、60名ほどで出発した研究会も5年後には学会に改称、今では400名を超える会員をかかえる学術団体になりました。今井先生が会長の時代には、ICAMEから名誉団体会員第1号の認定書を授与され、10周年記念論文集を *English Corpora under Japanese Eyes* としてオランダのEditions Rodopiから出版、国際的にも認められるようになってきました。Geoffrey Leech先生をはじめとする10名以上の著名なコーパス言語学者にも名誉会員になって頂きました。長年の夢であった師でもあり、友人でもあったJohn Sinclair先生をお招きしての講演会を本学会主催で関西と東京で開催、間もなく訃報に接し、寂しい、悔しい思いをしたのは小生が会長時代の忘れられない思い出です。齊藤先生が彼の逝去はコーパス言語学の第1世代と第2世代の交代を象徴するものだと思っておりましたが、多分、第1世代の小生も停年までとわずかですが、残された時間をまだまだこの分野で頑張るつもりですので、今後ともよろしくお願いいたします。

新会長は京都外国語大学の赤野一郎先生です。ご存じのように赤野先生は語法研究、『ウィズダム英和辞典』の編集で知られるなどコーパスを利用した著名な研究者で、本学会設立以来の運営委員として、あるいは前事務局長としても長年ご尽力をいただいております。4月からは赤野先生を中心とした新しい執行部での学会運営となりますが、旧来にも増した会員の皆様のご協力をお願いして、退任のご挨拶とさせていただきます。

第31回大会のご案内

英語コーパス学会第31回大会は、4月26日(土)、摂南大学寝屋川キャンパス(〒572-8508 大阪府寝屋川市池田中町 17-8 京阪本線寝屋川市駅(南出口)からバスで約15分 <http://www.setsunan.ac.jp>)で開催されます。なお関東方面からお越しの方は、京都駅で近鉄京都線に乗り換え、丹波橋駅経由で京阪本線に乗り換えてください。関西以西からお越しの方は新大阪駅で地下鉄御堂筋線に乗り換え、淀屋橋駅経由で京阪本線に乗り換えてください。京都、新大阪いずれ

からも45分程度かかります。寝屋川市駅発着の京阪バスの時刻表について詳細を知りたい方は、インターネット上のURL; http://www.keihanbus.jp/local/timetable_index.html の「寝屋川市駅(西口)」をご覧ください。さらに宿泊を必要とされる方は早めの予約をお勧めいたします。なお今大会の開催に際しまして、会場校の責任者である今井光規先生(摂南大学学長)を始め、植松茂男先生、家口美智子先生、住吉誠先生に準備万端整えていただいております。先生方のご尽力に深く感謝致します。

詳細は、同封の「大会資料」をご覧くださいの ですが、今大会の主なテーマは「英語辞典とコーパス」で、恒例になりました午前中のワークショップ、午後からの研究発表4件およびシンポジウムのいずれもが辞書に関わる内容になっております。

午前中のワークショップでは、「『用例コーパス』を使った英語指導・学習」と題して井上永幸先生(徳島大学)、岩井靖先生(兵庫県立佐用高等学校)、山本康一氏(三省堂辞書出版部)に、三省堂 Web 辞書サイト「用例コーパス」を使って、検索方法、教材・課題の作成方法の紹介と実習をしていただきます。

研究発表につきましては、運営委員の査読を経て準備委員会での最終審査の結果、次の4名の発表が決まりました。吉村由佳氏(元パーミンガム大学大学院生)の「コーパス分析による訳語選択 英和辞典の場合」、中山仁先生(福島県立医科大学)の「『例外的』用法の辞書記述 which 節および when/if 節に関して」、大友千乃氏(東北大学大学院生)の「日本語母語話者による英語研究論文における伝達動詞使用の特徴」、新井洋一先生(中央大学)の「ICE(International Corpus of English)GB を利用した文法解析」で、2室に分かれての研究発表となります。

シンポジウムでは、「英和辞典とコーパス」をテーマに、4人の講師に論じていただきます。中邑光男先生(関西大学)に『ジーニアス英和辞典』(第4版)、平田昌之氏((株)ピアソン・エデュケーション)に『ロングマン英和辞典』、井上永幸先生(徳島大学)に『ウィズダム英和辞典』(第2版)を例に辞書編集にコーパスがどのように活用されているか発表していただきます。その後、西村公正先生(元関西外国語大学短期大学部)に「コーパスを謳う英和辞典 苦闘するレキシコグラファー、欲深い利用者」というタイトルで英語辞典とコーパスの関係を総括していただきます。

以上のように、今回は英語教育・研究に重要な分野の「英和辞典とコーパス」がテーマですので多くの会員の参加を期待しております。なお、午前中のワークショップに参加希望の方は郵便・電子メール(件名「ワークショップ申込」)

で、所属と会員・非会員の別を明記の上、事務局までお申し込みください。英語コーパス学会の会員であれば参加費は無料です(非会員の場合は当日会費 1,000 円)。

会誌『英語コーパス研究』第15号について

『英語コーパス研究』第15号(2008)の進捗状況をお知らせします。ご投稿いただいた研究論文、研究ノート、シンポジウム発表原稿の査読がすべて終了し、印刷作業に入っています。次号の構成は以下の通りになりました。

- ・研究論文2編(投稿数6)
- ・研究ノート2編(投稿数2)
- ・シンポジウム発表論文2組(投稿数2)

本号に第30回記念大会時のシンポジウムを掲載いたします。ご期待ください。昨年同様、6月頃のニューズレター発行時に一括発送を予定しております。最後になりましたが、論文審査委員の先生方には、厳しい時間的制限の中にもかわらず丁寧に査読作業をお進めいただき、貴重なご助言を賜りました。この場を借りてお礼を申し上げます。さらに、第30回大会記念行事の一環として、創刊号から第15号までをCD-ROMで配布することになったことを付記いたします。

『英語コーパス研究』編集委員長 塚本 聡

東支部からの報告

2004年から今年度までの東支部が実施してきました講演会・講習会等について、期日、講演者等を列記して報告申し上げます。これを参考に是非積極的な協力・応募をお願いいたします。

| 開催日 | 会名 | 講師・発表者 |
|------------|-------------------|----------------------|
| 2004/8/10 | 第11回講習会 | 佐藤弘明 |
| 2004/9/11 | 第1回研究談話会 | 山崎俊次 千葉庄寿 吉村由佳 |
| 2004/11/27 | 第12回講習会 | Paul Rayson |
| 2005/3/27 | 第2回研究談話会(実技講習+発表) | 上田博人 |

| | | |
|------------|------------|-----------------------|
| 2005/9/24 | 第 3 回研究談話会 | 園田勝英 清水 眞 鳥飼慎一郎 |
| 2006/9/17 | 第 4 回研究談話会 | 小林雄一郎 大羽 良 |
| 2006/10/18 | 第 1 回講演会 | S. Hoffmann |
| 2007/10/7 | 第 2 回講演会 | 高橋 薫 |

内容の詳細については、東支部ホームページ、<http://english.chs.nihon-u.ac.jp/jaecs/>をご覧ください。

東支部支部長 新井洋一(中央大学)

学会賞応募規定

第 7 回の学会賞・奨励賞を募集いたします。これらの賞は英語コーパス学会の活性化のために設けられた賞ですので、奮ってご応募ください。

学会賞選考委員長 投野 由紀夫

【対象】英語コーパス学会の目的にてらし、英語のコーパス言語学に関する優れた研究業績をあげた学会員(個人またはグループ)とする。ただし、奨励賞は英語のコーパス言語学に関する優れた研究業績(論文の場合、学会誌『英語コーパス研究』に掲載されたものに限る)をあげた 35 歳以下または大学院修了後の研究歴 5 年以下の学会員個人に限る。

【応募方法】自薦、他薦を問わない。

【提出書類】1) 所定の推薦理由書(学会ホームページより入手)。

2) 論文の場合は現物またはコピー。単行本の場合は事務局で用意するので送付は不要。

【提出先】事務局

【応募期限】2008 年 3 月 31 日(月)

【発表】2008 年度秋季大会

2008 年度の大会日程と開催校

第 32 回大会 10 月 4 日(土)東京外国語大学

新入会員紹介(3 月 1 日現在、S は学生)

川端 一男 埼玉医科大学医学部
島田 将夫 福山平成大学
吉原 重寿 長野県中条高等学校

事務局から

会費納入のお願い

2008 年度会費(一般 5,000 円、学生 3,000 円)を、同封の払込取扱票をいお納めいただきますようお願いいたします。なお、郵便局発行の受領証をもって領収書に代えさせていただきます。領収書が必要な方は、80 円切手を同封の上、石川保茂(〒615-8558 京都市右京区西院笠目町 6 京都外国語大学)までお申し出ください。払込取扱票の通信欄によるお申し出はご遠慮ください。

過年度会費未納の方は、2008 年度分と併せてお納めください(払込取扱票にその旨添付いたしております)。なお、会誌『英語コーパス研究』第 15 号は 2007 年度の会費を納入していただいた方のみ送付いたします。また、2 年続けて会費未納の場合、Newsletter などの送付を中止させていただきます。

住所、所属などに変更や異動のある方は、必ず払込取扱票の通信欄にお書き添えください。

FORUM

コンピュータの発達と言語への応用

西村 道信(大手前大学)

mnishim@otemae.ac.jp

英語の研究面でも学習面でも、コンピュータが使用されるようになって久しい。今やコンピュータはユビキタスの時代であり、コンピュータの持つ潜在的な能力がいろいろな所で高く評価されている。コンピュータ、情報、英語、これが現代の三種の神器であると、ふざけて言

われることもあるが、あながち冗談でもなさそうである。それにしても、これほど急速にコンピュータが普及するとは、驚きを禁じ得ない。

このコンピュータなるものは、もともと軍事目的のために開発され、米国でも英国でも、敵の暗号を解読するために利用されていた。初期のコンピュータは真空管式で、寿命が 2000 時間とも言われ、よく切れたらしい。後にトランジスタが発明され、初めて実用的なものとなった。第二次大戦後、このコンピュータが平和利用にその価値が見出されることになる。以前コンピュータは電子計算機と言われていたように、確かに数学的な計算にその能力を遺憾なく発揮したが、実はコンピュータが得意とするのは言語の処理だったのである。Christopher Evans は *The Mighty Micro* で、コンピュータ革命を“Data Processing Revolution”と呼んでいる。言語は記号であり、コンピュータはこの記号を扱うことにその真価を発揮すると言うのである。この Evans の考え方には同感である。

今から 30 年ほど前になるが、パーソナル・コンピュータなるものが市場に出回り初め、物珍しさから買ったのはいいが、利用価値も使い方も分からず、返品をする人があったそうだ。今から思えば、当時のコンピュータは貧弱なものだった。それでもワープロソフトが出始めると、一気に売上高が上昇した。ワープロ専用機もあったが、コンピュータを選ぶ人が多かったのは、ソフトさえ入れ替えれば、簡単にバージョンアップが図れたからである。改めて、Evans の一言が思い起こされる。コンピュータは言語処理に真価を発揮するのである。

この頃から英語の研究者がコンピュータに興味をもち始め、言語処理を本格的に開始する。それ以前にメインフレームと呼ばれる大型コンピュータを利用している人もあったが、パソコンの普及によって、多くの研究者を得ることになる。その後は、英語コーパス学会も発足し(当時は研究会)、今では海外の研究者に負けない研究を行っている。

コーパスも整備されてきて、タグの問題も研究されている。文法解析にしる、タグシステムにしる、これからは AI の時代になるように思

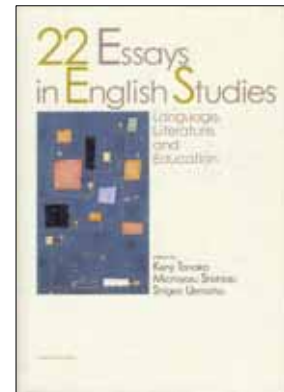
われる。MIT の Minski は以前 K-line という神経細胞のネットワークを提唱したが、これを人工的に作り、コンピュータに搭載できれば、本当の学習機能を備えた自分で考えるコンピュータができそうである。そうなれば、文法解析や文学理解までも、考えるコンピュータが自分の考えを提示することになるのだろうか。

新刊紹介

赤野 一郎(京都外国語大学)
i_akano@lufs.ac.jp

*22 Essays in English
Studies: Language,
Literature, and
Education*

edited by
Kenji Tanaka
Michiyasu Shishido
Shigeo Uematsu
A5 版 430 頁
4,500 円+税
SHOHAKUSHA
ISBN978-4-7754-0131-6



本書は、Preface によると、学外に対して摂南大学外国語学部の研究活動を公にするために編まれた、同学部に所属する[した]教授陣 22 名による英文論文集である。構成は Language, Literature, Education の 3 部からなっている。内容については、紙幅の関係で書評子の専門分野に近い数編を紹介するに止めることをお許しいただきたい。

今井光規氏の“Enumeration in Middle English Metrical Romance”は、韻文口ロマンスで一般的な技法 enumeration が、中英語韻文口ロマンス、*Havelok the Dane* と *King Horn* においてどのように用いられ、どのような機能を果たしているか、両者の差異に焦点を当て探ろうとした論考である。enumeration を統語構造から、細かなパリエーションはあるものの、2 つに大別し、名

詞句が3つ以上並置されたものをタイプ1、ひとまとまりの文が列挙されたものをタイプ2と呼び、物語が展開する中で、タイプ1は、一端その展開を止め、眼前の状況をより鮮やかに力強く描写する機能を果たすのに対して、タイプ2は文から構成されるが故に、語からなるタイプ1より遥かに強力な描写力を有し、そこでは時として筋の展開が見られると主張する。次いで、上記の2つの作品の量的差異を示し、文体上の差異の分析を行ない、enumerationが中英語韻文ロマンスの語りスタイルの特徴付けに重要な役割を果たしているとは結論づける。

西川真由美氏の“Interpreting Interjections: A Perspective of Relevance Theory”では、著者が長年続けてこられた間投詞研究の一端が示されている。間投詞をoh, ah, ouch, wowなど、刺激に対する自然な反応音を模倣した話し手の感情を表出するprimary interjectionと、good, really, indeed, what, why, Christなど、すでに存在する語彙項目を含む文が縮められてできたsecondary interjectionに大別し、それぞれの間投詞が談話においてどのように解釈されるかを、関連性理論の枠組の中で明らかにしようとした興味深い論考である。primary interjectionが伝える情報は、その形式と意味の自然な類似性(natural resemblance)を通して解釈されるのに対して、secondary interjectionの解釈は、当該間投詞を含む元の文に基づいて行われる。そしてこの分析方法によって2つのタイプの間投詞の諸特徴を適切に説明できるとし、その有効性が主張されている。

住吉誠氏の“On the Syntactic Behavior of *provided that*”はQuirk *et al.*が「複合従属接続詞」(complex subordinator)と呼ぶ*provided that*をとりあげ、その名の示すように単一の接続詞なのか、*provided*と*that*はHuddleston & Pullum (2002)が主張するように、 $[\text{provided}]_{\text{prep.}} [\text{that}]_{\text{obj.}}$ のように分割できるのかをBNCデータに見られる統語的振る舞いから検討している。その結果、実際には両方の性質を兼ね備えた振る舞いをすることを実証的に示し、従来「複合従属接続詞」として一括して呼ばれているものは、分詞の部分が分詞としての性質を保持している分

詞構文(*eg. thinking that*)から分詞的機能を失い単一接続詞化しているもの(*eg. seeing that*)まで漸次性(gradient)があり、*provided that*は接続詞としては発達段階にあり、その中間に位置すると結論づけている。

wonderful, terrible, enormousなどの程度形容詞は、程度が甚だしいことを語の意味として含んでいるので、veryの修飾を許さないとされている(*eg. ???The food was very terrible.*)。この通説に対して、家口美智子氏の“Semantics of Speaker-Oriented Extreme Adjectives”は、BNCに見られるveryで修飾された実例を踏まえ、どのような場合にveryの修飾を許し、あるいは許さないのかを探ろうとする意欲的な論考である。著者は話し手が状況に対してどの程度主観的に係わるかのその度合いが文の容認性を決定する、すなわち話し手の感情を表す主観的表現であればあるほど、veryの修飾を許さず、逆に事実の報告など、客観性が高まるほど、veryとの結合が許されると主張する。この主張は、主観的内容の表現方法としてふさわしい*S is very Adj*の叙述文では容認不可になるのに対して、限定用法*a very Adj + noun*は客観描写にふさわしく、したがって容認度は格段に高くなるという統語的事実によって裏付けられる(*eg. My daughter's got a boyfriend. a. ???He is very terrific. b. (?) He is a very terrific man.*)。このことは比較構文にも当てはまり、叙述用法では非文法的だが、限定用法の比較級や最上級(*eg. More excellent news is .../one of the most excellent reports...*)では容認可能であることを例示し、主張の正しさを補強している。

1つの大学の22名にものぼるスタッフによる英語で書かれた、しかも質的レベルの高いこのような刊行物は他に類を見ない。また当学会の元会長であられた今井光規先生が昨年秋に学長に就任された摂南大学、特に「外国語学部英語コース」を束ねる「英語教室」は、この数年来、英語に係わる様々な学会や講演会を開催し、大学の英語教育関係者の注目を集めている大学である。当学会の2008年春の大会が同大学で開催されるのも、同教室の活発な研究活動の現れと言えよう。

英語コーパス学会 Newsletter No. 61

June 1, 2008

■会長: 赤野 一郎
■事務局: 〒175-8571 東京都板橋区高島平 1-9-1 大東文化大学 山崎俊次研究室内
■TEL: 03-5399-7372 ■郵便振替口座: 00940-5-250586 (英語コーパス学会)
■URL: <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html> ■E-mail: yamazaki@ic.daito.ac.jp

JAECS
Japan Association for English Corpus Studies

会長就任挨拶

京都外国語大学 赤野 一郎

本年4月より、中村純作先生の後を引き継ぎ、会長に就任致しました。この場をお借りして、当学会の過去を振り返り、今後の展望にも触れながら、一言、ご挨拶を申し上げます。

英語コーパス学会は、その前身であります「英語コーパス研究会」の名称のもと1993年4月に、当時大阪大学言語文化部の教授であられた齊藤俊雄先生を会長に、今井光規先生の研究室に事務局を置き発足いたしました。5月に発行されたNewsletter第1号によりますと、「研究発表・講演への出席者は、北海道、関東、四国、九州からお越し頂いた方々を含め、56名の多数にのぼり、極めて活発な質疑応答がありました」とありますが、今から見ますとささやかな研究会の出発であったと思います。設立時に運営委員として名を連ねておられる先生は、歴代会長の齋藤先生、今井先生、中村純作先生と、退会されたり、亡くなられた方を除きますと、西村道信先生と西村秀夫先生と私の6人です。1995年から8人の先生方(園田勝英、朝尾幸次郎、深谷輝彦、正保富三、井上永幸、地村彰之、中尾佳行、田畑智司(敬称略))が運営委員に就任され、現体制の基礎が築かれました。

1997年の研究会から現在の「英語コーパス学会」に名称を変更し新たなスタートを切り、翌年1998年に学会の総力をあげて、齊藤俊雄・中村純作・赤野一郎編『英語コーパス言語学 基礎と実践』が研究社より出版されました。1999年に東支部を発足させ(詳細は新井洋一先生の「東支部支部長退任挨拶」をご覧ください)、東日本でのコーパスを利用した英語研究の発展に努めてきました。2001年には学会賞が制定され、翌年、*English Corpus Linguistics in Japan* (Amsterdam, Rodopi, 2002)の編者、齊藤先生、中村先生、山崎俊次先生に第1回英語コーパス学会賞が授与されました。2002年に名古屋大学で創設10周年の記念大会を2日間にわたり開催いたしましたし、昨年秋には立教大学で15周年記念大会を行い、着実に発展してまいりました。

コーパスに関わる研究で著名な言語学者も海外から多数お迎えしました。Jan Svartvik, Graeme Kennedy, Manfred Markus, Geoffrey Leech, Douglas Biber, Randi Reppen, Jan Aarts, Stig Johansson, Charles F. Meyer、そして2006年8月にお呼びしたJohn Sinclair先生は立命館大学と日本大学でのご講演が最後となりました。海外の学者の招聘については、今井先生、山崎先生、中村先生のお世話で実現しました。

ワークショップについては個々の内容に触れる余裕はありませんが、最初の頃はコンピュータ操作がおぼつかない参加者も多く、初心者講習という感じが強かったのですが、Windowsパソコンとインターネットの爆発的普及によりコンピュータユーザーの裾野が広がるにつれて、高度な統計処理に至る様々な内容で行われ、コーパスとコーパス利用の普及にワークショップが果たした役割は大きかったと思います。

事務局は今井先生から齊藤先生、西村秀夫先生、中村先生、私、山崎先生と受け継がれ、5月末現在、会員は421名に達しております。コーパスに基づく英語とその関連領域の研究団体として唯一の学会であり、この分野で果たす当学会の役割は大きなものがあります。理論言語学や英語教育の分野におけるコーパス利用はますます盛んになってきており、摂南大学で行われました第31回大会のワークショップ、研究発表、シンポジウムで明らかのように、辞書編纂におけるコーパス利用の勢いは止まるところを知りません。また投野由起夫先生、杉浦正利先生、金子朝子先生たちの学習者コーパス構築とそれに基づく研究は、成果が稔りつつあり、中高の英語の先生方にもコーパスの重要性が広く認識されるようになりました。

このように、当学会にとって追い風の中、今後まだまだ会員の増加が望めることを確信しておりますし、現在会員である皆さまの、学会に対する期待もますます大きなものになっていくと思われまふ。その期待に応えるべく、運営委員の先生方のご協力を得て、学会の発展に尽くすつもりですので、会員の皆様は今まで以上のご支援とご協力をお願いいたします。

第 31 回大会報告

概要

英語コーパス学会第 31 回大会は、4 月 26 日(土)、摂南大学寝屋川キャンパスで開催されました。素晴らしい天候に恵まれ、参加者 124 名(会員 94 名、新入会員 19 名、当日会員 11 名)という盛況のうちに終了致しました。ちなみに午前中のワークショップの参加者は 61 名でした。

本大会は、コーパス言語学の中心的課題であり、会員のなかで大きな業績をあげている「辞典とコーパス」という大きな括りでワークショップとシンポジウムを計画しました。恒例のワークショップは「『用例コーパス』を使った英語指導・学習」と題して井上永幸先生(徳島大学)、岩井靖先生(兵庫県立佐用高等学校)、山本康一氏(三省堂辞書出版部)が講師を務められました。現在三省堂が Web 上で無料公開しているデュアルディクショナリーの「用例コーパス」(改良版)を使って、検索方法、教材の作成方法等の実習を通して英語指導・学習に役立つワークショップでした。非常に分かりやすく、有意義で興味の持てる内容であったとの感想を参加者から聞きました。講師の方々にこの紙上を借りてお礼申し上げます。

午後の大会では、赤野一郎会長(京都外国語大学)の会長就任を兼ねた開会の挨拶のあと、開催校を代表して摂南大学学長の今井光規先生にご挨拶をいただきました。元会長、現運営委員でもある今井先生には学長としてユーモアを交えながらご挨拶をいただいたことにこの場を借りまして感謝申し上げます。引き続き、瀬良晴子先生(兵庫県立大学)の司会により年次総会が開かれ、2007 年度の決算報告と会計監査報告、2008 年度の予算の提案があり承認されました。大会に出席されなかった会員の皆様には決算書と予算書を同封いたしましたので、ご確認ください。

引き続き「英和辞典」と「言語研究」のテーマでのパラレルセッションがもたれ、それぞれ 2 件の研究発表が行われました。最後に、午前

中のワークショップと連動して「英和辞典とコーパス」のテーマでシンポジウムを開催しました。それぞれの司会の先生に概要をご執筆いただいておりますので、「研究発表」および「シンポジウム」のセクションをご覧ください。

大会終了後の懇親会には 55 名の参加がありました。梅咲敦子先生(立命館大学)の司会のもと、会長挨拶の後、中村純作先生(立命館大学)の乾杯のご発声で懇親会が始まりました。会員同士の交流と情報交換で盛り上がり、午後 7 時半にはすべての大会行事が終了いたしました。

今回の大会は大きなテーマである「辞典とコーパス」という会員共通の興味と関心から多くの参加があり、盛会であったことは事務局のこのうえない喜びでした。本学会の運営委員であり、摂南大学の学長である今井先生、開催校から植松茂男先生、家口美智子先生、住吉誠先生には、大会の準備、受付、ワークショップ、研究発表に細かい準備と心配りをしていただきました。加えて学生、院生の方々にもご協力いただきました。この紙上を借りて厚くお礼申し上げます。

研究発表

コーパス分析による訳語選択 - 英和辞典の場合

吉村 由佳(元 Birmingham 大学大学院生)
二言語辞典は訳語選択が適切に行われない場合、学習者の母語と目標言語との意味の差が大きくなり、ずれが生じる。実際に日本人英語学習者が主に使うのは英英ではなく英和辞典である。近年の英和辞典はコーパスを利用して頻度表示・語法解説などは充実してきたが訳語については、まだ改善の余地が残されていることを示唆された。

まず、コーパスを用いて適切な訳語を選択する方法を述べられた。具体的題材に try という語を取り上げ、Bank of English から直接目的語として名詞が後続する try のコンコーダンスラインを抽出、その内 86%を占める名詞群を分析して、「試されるもの」を示すこの名詞群をその特性により細かく分類された。辞書編集時には、語義を大きく分類する立場と細かく分類す

る立場がある。英和辞典の場合、細かく分類する方が意味や共起名詞の種類を伝えやすいが、実際の辞書編集においては、文字数という紙面上の制約にとらわれ、適切な訳語を選択できないケースも生じる。コンコーダスラインから、直接目的語に製品(22%)や飲食品(14%)が含まれることがわかり、この場合は「試して[食べて]みる」などの訳語が望ましい(「試食する」はニュアンスが異なる)。しかし、人や場所(20%)が目的語の場合、同じ訳語では違和感があり、「会って[行って]みる」などの方が適切であることを述べられた。この様にコンコーダスラインを精査することにより、共起名詞をグループ化し、それぞれに適切な訳語選択が可能になる事を提示された。最後に、日本語コーパスの Kotonoha Corpus を用いて、名詞 try (give it a try など)の訳語をいくつか抽出し、その共起語を Bank of English の名詞 try の共起語と比較することにより、より使用域に近い訳語は何かを考察された。英和辞典で一番多い訳語はフォーマルな意味の「試み」であり、この「試み」を訳語として使うことは適切ではないことを示し、次のようなサンプルエントリーを提示された。

図 1 [通例単数形/しばしば a ~] やって[試して]みる
こと; 努力. 2(ラグビー)トライ。

質疑応答では「先生は語義をまとめる『まとめ派』か、細かく分ける『わけ派』か」などの質問がなされた。

神谷 昌明(豊田高専)

「例外的」用法の辞書記述 which 節および when/if 節に関して

中山 仁(福島県立医科大学)

本発表は、(1)の which を用いた非制限的關係詞節と(2)の補語位置に生じる(be 動詞に後続する)when 節・if 節を取り上げ、「例外的」用法を辞書に記述する意義、およびその際のコーパス活用について述べたものである。

(1) She's borrowed a history book. Which suggests her teacher is having some influence on her.

(2) Frustration is when you can't find the car keys.

(1)の独立文となった which 節の特徴を先行研究(滝沢(2001); which に後続する要素の語彙パターン)を紹介し、次に中山(2006)の先行研究を紹介した。中山(2006)は語用論的な分析を行い、which 節の時制は現在が多く、which 節が結果としての「新たな考え」を表す例や想起としての「新たな考え」を表す例を示した。そして辞書への取り込みと記述の試みの具体例(『ジーニアス英和辞典』第4版、『ウィズダム英和辞典』第2版など)を示し、今後さらに追加すべき情報(語法注記の具体化、意味の補足、成句)を提示した。

(2)の「例外的」when/if 節はまだ辞書の記述にはないが、辞書記述に値する表現であることを示唆した。when/if 節は一見名詞節として機能しているため、日本人英語学習者は「(if 節)~かどうか」のような解釈をするケースが多いので注意が必要な構文である。先ず、従来の考え方を述べ、コーパスによる検証、LDOCE4 における when 定義の採用、中山(2007)の先行研究を紹介した。最後に辞書への取り込みと記述の試みを次のように提示した。

when 節欄に NP is when 節の構文パターンとその解釈パターンを記述する。

[A is when...] 「A とは...の場合に(当てはまる)」の解釈を与える。

注記: the time の意味を含んだ名詞節とは異なる。((話))、((書))で用いられる。((やや略式))? A に来る内容についての解釈を与える。例えば、「語の定義などに用いられる」とか。

神谷 昌明(豊田高専)

日本語母語話者による英語研究論文における伝達動詞使用の特徴

大友 千乃(東北大学大学院生)

本発表の目的は、学術・研究目的のために用いられる英語(English for Academic Purposes)に焦点をあて、英語の研究論文で観察される日本語母語話者が書く英語の特徴を、英語母語話者の書く英語との比較により明らかにすることである。発表では特に、客観性や正確な情報伝達に重きが置かれる研究論文において、著者の研

究に対する認識や主張を表す上で重要な役割を果たす伝達動詞について分析が行われた。

調査対象としたのは政治学/国際関係分野と物質科学分野の研究論文である。それぞれの分野から、日本語母語話者が書いた英語の論文 20 本と英語母語話者が書いた英語の論文 20 本を収集し、4 種類のコーパスを作成した後、コンコードソフトウェア AntConc を用いて伝達動詞の抽出等を行った。分析の対象とした伝達動詞は、Charles(2006)によって ARGUE グループに分類されている 11 種類の動詞 (argue, assert, claim, conclude, explain, mention, note, predict, say, suggest, write) である。4 つのコーパスにおける伝達動詞の生起数を調査し、AntConc を用いて対数尤度比検定を行った結果、上記 11 種類の動詞のうち、特に argue, note, say の用法に際立った差異が観察された。

質疑応答では、「直接引用における伝達動詞をどのように扱ったか」という質問に対し、「今回は含めている」と回答された。また、対数尤度比検定について確認の質問があり、それぞれの伝達動詞について分野間と話者間で検定を行ったと回答された。

柳 朋宏(中部大学)

ICE (International Corpus of English) GB を利用した文法解析

新井 洋一(中央大学)

本発表では、ICE(International Corpus of English)の概要、その1部門であるICE-GBに付与された単語・範疇等の文法ラベル、解析樹ICE-GB専用の検索ツールであるICE-CUPによる検索事例が紹介された。

ICE-GBの利点はその標識付けにある。英語コーパスの大部分が、語や句レベルでの品詞標識付けにとどまっているのに対し、ICE-GBでは、品詞標識に加え、文法機能や統語関係に関する標識や、間つなぎ表現等の談話に関わる標識が付与されている。本発表では、そのような標識の利点を活かした検索事例が紹介された。

if 副詞節の生起位置のジャンル別分布に関する先行研究を紹介した後、発表者による I mean

の分析が紹介された。‘oh no I don’t guarantee them I mean you can’t do that’(Biber *et al.* 1998: 72)における I mean は「文字通りの解釈」と「間つなぎ表現」の2通りの解釈が可能であり、判断が難しいが、ICE-GBでは談話標識の標識 DISMK や定形表現の標識 FRM が採用されており、この標識を利用することで間つなぎ表現として用いられている I mean を抽出することが可能であることが示された。また、前置詞残置の検索事例を紹介し、目的語が後続しない前置詞の検索が可能であることが示された。

質疑応答では、「I mean のような談話標識に標識付けを行うのは難しいのではないか」という質問に対し、「ICE-GBでは、英語の言語直観を持つ言語学者によって1文1文確認されている」と回答された。

柳 朋宏(中部大学)

シンポジウム

英和辞典とコーパス

本シンポジウムでは、最近5年間に刊行された収録項目数9万から10万語レベルの上級者向け学習英和辞典のうち、『ジーニアス英和辞典』第4版(2006、大修館書店)〔以下、『ジーニアス』〕、『ロングマン英和辞典』(2006、桐原書店)〔以下、『ロングマン』〕、『ウィズダム英和辞典』第2版(2007、三省堂)〔以下、『ウィズダム』〕を取り上げ、それぞれの辞典の編集関係者に各辞典におけるコーパスの扱いや編集作業の裏話をいただいた。

『ジーニアス』からは中邑光男講師(関西大学教授;編集委員)にご登壇いただき、コーパス(G4C)はどのように構築されたのか、G4Cをどのように利用したのか、日本人執筆者・ネイティブスピーカー・コーパスのあるべき関係をどのように考えたのか、という3つのテーマについてお話しいただいた。G4Cの構築では、実際に中邑講師が読んだり聞いたりした媒体をできるだけ選ぶようにしたこと、執筆者とは別のグループがコーパスに基づい

てコロケーションなどの基礎データを担当していること、用例をめぐるネイティブスピーカーとの徹底的なやりとりのエピソードが興味深かった。

『ロングマン』からは村木幸一講師((株)ピアソン・エデュケーション・(株)桐原書店; 事業本部長・新規事業開発本部)にご講演いただいた。英語コーパスの質に適合する日本語コーパスを構築するようレジスターにこだわっており、訳語もターゲットとした高校・大学の中級を対象とした若者言葉に近いものになっているということであった。例えば、最近の日本の高校生の国語力に合わせて、on the fence には「日和見主義の」ではなく、「(議論などで)どっちつかずの態度をとる」といった訳語が与えられているという。また、普段は聞くことのできない編者と編集部との葛藤のくだりは聞く者を引きつけた。

『ウィズダム』は井上永幸(徳島大学教授; 編者)が担当させていただいた。『ウィズダム』の編集方針に簡単にふれた後、三省堂コーパスが日常生活で用いられる平易な英語を中心にバランスを重視して構築されたこと、効果的・効率的に編集作業を進めるために執筆者を対象としたコーパス活用講習会・メーリングリストによる各種連絡・html 版によるゲラ確認などが行われ、html 版がデュアルディクショナリーのもととなっていることを紹介した。その後、コーパス基盤的な手法とコーパス駆動的な手法が、紙面でどのように反映されているかを具体例で紹介した。

辞書編集やコーパス構築の経験をお持ちの討論者としてご参加いただいた西村公正講師(元関西外国語大学短期大学部教授)には、ご経験をふまえて、ユーザーの立場からご意見をいただいた。local Japan time、no such thing などを始め、いくつかの表現について各種英和・英英辞典の記述を見た後、日本人英語学習者にとって使いやすい辞書記述とはどういったものかについて示唆的な指摘があった。また、全体像をとらえにくい多義項目についてはインデックス表示が必須であること、く

だけた文脈で頻出する同化など、日本人の苦手な発音の異形については積極的に表示する必要があることなどが指摘された。各アルファベット最終ページに残されたスペースに関するコメントは、さすがに辞書編集の経験者ならではのものではなかった。

フロアからの質問も寄せられて時間いっぱいまで活発な議論が行われ、英語学習・研究のツールである英和辞典に対する関心の高さと、今後の英和辞典の発展に対する期待を感じさせるシンポジウムとなった。

井上 永幸(徳島大学)

人事に関する決定事項について

大会前日の4月25日午後6時より開かれた運営委員会において人事案4件が審議されました。まず、運営委員の任期については、新井洋一先生(中央大学)、大津智彦先生(大阪大学)、岡田毅先生(東北大学)、高橋薫先生(豊田高専)、塚本聡先生(日本大学)の留任が承認されました。学会賞選考委員会委員長には深谷輝彦先生(椋山女学園大学)が選任されました。長年ご尽力いただきました西村道信先生(大手前大学)が退任され、新任として金子朝子先生(昭和女子大学)、西納春雄先生(同志社大学)が選ばれました。東支部長の新井洋一先生(中央大学)は2期4年努められ、新東支部長に投野由紀夫先生(東京外国語大学)が選ばれました。この場をお借りして、退任されました西村、新井両先生のご貢献に対して御礼を申し上げます。編集委員会委員については、塚本聡先生(日本大学)、岡田毅先生(東北大学)、滝沢直宏先生(名古屋大学)、小林多佳子先生(昭和女子大学)の留任が承認されました。

東支部支部長退任挨拶

東支部は、1998年の7月、当時の会長であられた齊藤俊雄先生、事務局の中村純作先生を中心に、数人の有志が集まり、東支部設立について会合が持たれ、翌年の4月まで設立準備会として活動し、1999年の4月の総会で東支部

の発足が承認されて以来現在に至っています。発足の目的として話し合われたのは、大学教員のみならず、学生・中学校・高等学校の先生方を含めたコーパス活用の講習会、研究会などを、関東地区で開催してはどうかというものでした。

2004年4月からのこの4年間、前号のNL60に記載しましたように、おもに研究談話会、講演会を中心にした活動を続けて参りました。この間、前支部長で現事務局の山崎俊次先生には大変お世話になりました。また、講師を引き受けて下さった先生方、東支部 HP 担当の塚本聡先生をはじめ、特に投野由起夫、大和田栄東支部運営委員の先生方に感謝申し上げます。そして、いつも励ましの言葉をかけて下さった現会長の赤野一郎先生、会計処理でお世話になりました高橋薫、石川保茂両先生にも、この場をお借りして御礼申し上げます。

この4月より、投野由起夫先生(東京外国語大学)が新しい支部長として就任され、ますます幅広い活動が期待されます。今後も会員のみならず、まのご協力を、よろしく申し上げます。

新井 洋一(中央大学)

東支部支部長就任挨拶

英語コーパス学会の東支部は、山崎先生、新井先生のもとに今までさまざまな活動を行ってきました。コーパス入門的なワークショップ、研究談話会などがその主なものです。私も、先輩方がやってこられた、裾野を広げる活動をまず第一に推進したいと考えております。コーパスは方法論として、いろいろな分野に応用が可能です。そういった可能性を紹介する意味でも、理論言語学、応用言語学の多分野の先生方を巻き込めるような面白いセミナーやワークショップの企画を考えたいと思います。また、東支部は人数が少ないので、関西の先生方の中から講師などをお呼びして、活性化を図るのもよいことでしょう。

第2に若手の登用をどんどんしたいと思えます。運営委員の下位組織のようなものを、今後、東支部として組織していければと考えていま

す。研究企画委員のような名称で皆さんが気軽に参加できるような勉強会を定期的に持てるとうよいと思います。

最後に、英語学、英語教育、英米文学といった従来の3分野がよい意味でバランスをもって発展できるようにしたいと思います。そのために、英語教育出身の私を助けていただくために、英語学、英米文学の先生方の支えが必要です。是非とも皆さん積極的に東支部のためにご協力をお願い申し上げます。

投野 由紀夫(東京外国語大学)

ハンドアウトのダウンロードサービス

第31回大会の研究発表とシンポジウムのハンドアウトを希望される会員に対して、ダウンロードのサービスを行います。期間は、このニューズレターお届けより6月30日までとします。ファイルはPDFとなっております。ご希望の方は、石川保茂先生(yasuishikawa@hotmail.com)まで下記のハンドアウトのうちご希望の番号をお知らせください。追ってURLをお知らせいたします。なお、発表者の著作権保護の立場から印刷は「許可しない」に設定してあります。

1. ワークショップ：「用例コーパス」を使った英語指導・学習
2. コーパス分析による訳語選択
3. 「例外的」用法の辞書記述
4. 日本語母語話者による英語研究論文における伝達動詞使用の特徴
5. ICE-GB を利用した文法分析
6. シンポジウム：英和辞典とコーパス
末尾になりましたが、資料を提供くださいました方々のご厚意に感謝いたします。

会誌『英語コーパス研究』第15号について

昨年より、6月発行のニューズレターとともに会誌をお届けしておりましたが、第15号は、30回大会記念事業の一環として過去の会誌の

電子化を行う作業の関係で、本ニュースレターと同時に届けられておりません。

印刷作業はほぼ完了しており、30回記念大会論文(4編)、研究論文2編、研究ノート2編、シンポジウム発表論文1部(4編)より構成されています。刊行を待ち望まれていた方には申し訳ありませんが、もうしばらくお待ち下さい。

塚本 聡(日本大学)

『英語コーパス研究』編集委員会委員長

会誌『英語コーパス研究』第16号について

『英語コーパス研究』第16号の原稿を次の要領で募集いたします。今回より、投稿規定を一部変更し、下記の通りといたします。ページ数による上限の明確化が主は改正点となります。具体的には下記【原稿の長さ】をご参照下さい。会員各位の積極的な投稿をお待ちしております。

【原稿の種類】

1. 英語コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた「研究論文」、「研究ノート」、「実践報告」
2. 「書評」、「コーパス紹介」、「ソフト紹介」、「海外レポート」、「論文紹介」などの各種情報あるいは紹介原稿

【投稿申込締切】2008年7月31日(木)

氏名、所属、原稿の種類とタイトルを下記原稿提出先までお知らせください。

【原稿提出締切】2008年9月30日(火)

ハードコピー4部およびフロッピーディスクを提出。論文・研究ノートの冒頭には題名のみ記し、氏名(ふりがな)、所属・職名、住所、電話番号、電子メールのアドレスを明記した別紙(1部)を添付のこと。

【問い合わせ先・原稿提出先】

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水 3-25-40

日本大学文理学部 英文学科 塚本 聡

TEL: 03-5317-9709 FAX: 03-5317-9336

Email: tukamoto@chs.nihon-u.ac.jp

【原稿の長さ】

1. 研究論文

和文 A4 サイズ 1ページあたり 35字×30行、17枚以内

英文 A4 サイズ 1ページあたり 70ストローク×35行、17枚以内(10.5ポイント使用)(いずれも Abstract(英文)、図表、注、書誌、付録を含む)。

2. 研究ノート

1ページあたりは上記の書式と同様で、12枚以内(Abstract(英文)、図表、注、書誌、付録を含む)。

3. その他

研究論文の半分以下。

【書式】第14号所収の論文を参考にしてください。詳細は学会ホームページ (<http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/>) でご確認ください。

【採用通知】11月頃

【刊行予定】2009年5月

なお、この7月末に設けられた投稿申込締切への募集の有無に拘わらず、9月末の原稿締切までに投稿頂ければ、会誌への投稿は可能です。投稿をお待ちしております。

『英語コーパス研究』編集委員会

第32回大会の日程と研究発表募集

2008年度の秋期大会(第32回大会)は10月4日(土)に東京外国語大学府中キャンパスで開催される運びとなっております。是非、ふるって研究発表等に応募し、また大会にご参加ください。会長、大会準備委員、事務局ともどもお待ちしております。

MLでもご連絡いたしますが、大会での研究発表を次の要領で募集いたしております。発表を希望される方は、下記の要領に従って、電子メールで事務局にお申し込みください。

【資格】本学会会員であること。

【内容】本学会にふさわしい、コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた研究。

【応募方法】冒頭に題名を記し、800字~1200字(参考文献表は枚数に含めない)にまと

め、事務局まで添付ファイルで送付のこと。メール本文には氏名(ふりがな)、所属・職名、住所、電話番号、電子メールのアドレスを明記すること。

【応募締切】2008年6月16日(月)必着

【採否決定】2007年7月末日(予定)

【発表時間】発表20分+質疑応答10分

今後の大会日程と開催校

第32回大会 10月4日(土)東京外国語大学

第33回大会 4月(土)神戸大学(日程未定)

第34回大会 10月(土)青山学院大学(日程未定)

学会賞について

3月31日に締め切りました今年度の学会賞には3件、奨励賞には2件の応募がありました。今年度秋の大会の時に結果を発表すべく現在選考委員会で鋭意審査中です。

深谷 輝彦(椋山女学園大学)

学会賞選考委員会委員長

新入会員紹介(5月20日現在、Sは学生)

和泉 爾 帝塚山学院泉ヶ丘中学校高等学校
磯山 固也 東福岡高校
内田 富男 明星大学 経済学部
金田 拓 東京外国語大学大学院 S
木村 匡史 小学館 外国語編集
桑原 慧 徳島大学大学院 S
小池 省三 株式会社 サイテック
鈴木 大介 京都大学大学院 S
鈴木 三千代 関西学院大学非常勤講師
樋口 昌幸 広島大学
浮網 茂信 大阪大谷大学
三木 望 大阪大学言語文化研究科 S
水野 邦太郎 福岡県立大学
宮内 妃奈 福岡女学院大学短期大学部
宮元 彩加 東京外国語大学 S
村上 明 東京外国語大学大学院 S

山本 康一 三省堂

事務局から

会費納入のお願い

2008年度会費(一般5,000円、学生3,000円)を、同封の払込取扱票を使いお納めいただきますようお願いいたします。過年度会費未納の方は、2008年度分と併せてお納めください。今回は会費の納入・未納にかかわらず払込取扱票を同封いたしております。郵便局発行の受領証をもって領収書に代えさせていただきます。領収書が必要な方は、80円切手を同封の上、石川保茂(〒615-8558 京都市右京区西院笠目町6 京都外国語大学)までお申し出ください。払込取扱票の通信欄によるお申し出はご遠慮ください。なお、会誌『英語コーパス研究』第15号は2007年度の会費を納入していただいた方にのみ送付いたします。また、2年続けて会費未納の場合、Newsletterなどの送付を中止させていただきます。

住所、所属などに変更や異動のある方は、必ず払込取扱票の通信欄にお書き添えください。

FORUM

全米コーパス学会 2008年大会に参加して

石川 慎一郎(神戸大学)

iskwshin@gmail.com

はじめに

2008年の3月13日から15日まで、米国ユタ州のプリガムヤング大学(BYU)を主会場に全米コーパス学会(American Association for Corpus Linguistics: AACL)の大会が開催され、筆者も研究発表者の一人として参加した。事務局の依頼に基づき、本稿では、表記学会の様子を簡単にご紹介したい。ただし、あいにく学期末と重なり、会期のうち参加できたのは13、14の2

日間のみであった。ゆえに、筆者が見聞した範囲での(主観的な)報告であることをご了解いただきたい。

なお、大会のウェブサイト (<http://corpus.byu.edu/aac12008/>) 上には 138 ページにわたるプロシーディングスの全体や、一部の発表のパワーポイント実物なども公開されているので、個々の発表への言及は最小限にし、筆者の印象に残ったことを数点述べて報告の責を果たしたい。

AACL とは？

いちおう全米コーパス「学会」というふうに訳したが、たとえば日本の英語コーパス学会のように、会長がいて事務局があってというふうな、しっかりした組織があるわけではない。主要メンバーの中で次回大会の開催地と担当者を決めると、後は会運営の一切を担当者にゆだねているようである。AACL はこれまでに、ミシガン(1999) 北アリゾナ(2000) ポストン、マサチューセッツ大学(2001) IUPUI(2002) モントクレア州立(2004) ミシガン(2005) 北アリゾナ(2006)の各大学を巡回し、今回の BYU での AACL2008 に至っている。

ワークショップ

会期の前日の 12 日には、統計ソフト R を使った言語統計のワークショップが開かれた。筆者は都合で参加できなかったが、参加者によると非常に有意義なワークショップだったとのことである。日米問わず、数量データをより妥当に扱ってゆくことがコーパス言語学者の共通の関心事になりつつあるようである。

会場

会場はユタ州の BYU のキャンパスと、キャンパスからバスで 40 分ほど移動したアスペングローブという大学所有の会議センターの 2 か所であった。初日は大学で開会式と基調講演を行った後、バスでアスペングローブに移動、終了後、バスで大学に戻るというプラン。2 日目は大学で集合し、アスペングローブに移動。夕方に大学に戻り、いったん解散の後、大学で夕食。3 日目は、終日、大学というプランである。毎日のバスでの長い往復はかなり疲れるものであったが、たまたま隣り合わせた世界中の参加

者といやでも雑談せざるを得ない環境というのは、後から考えれば意外に良かったのかもしれない。

アスペングローブはログハウス風の趣のある建物で、正面に大きく取られた窓からは雪山が一望できる。大会を企画したブリガムヤング大学の Mark Davies 教授がアスペングローブを会場に使いたかった気持ちがよくわかる素晴らしい施設であった。ただ、「準備できることは完璧に準備したが、唯一準備できなかったのは天気だ」というユーモアたっぷりの開会あいさつでの予言どおり、あいにくの荒天で、豪雪のためにバスが立ち往生してプログラムがずれ込んだり、バスを途中で乗り換える羽目になったりするなど、連日、スキーリゾートならではのハプニングも少なくなかった。

Mark Davies 教授と BYU-BNC

英語コーパス学会の会員であれば、Mark Davies 氏の名前を聞けばすぐにピンとくることであろう。今大会の企画・準備・運営の実務を文字通り一手に担った同氏は、ネット上で無償でアクセスできるすぐれた BNC 検索サイトである BYU-BNC の開発者その人である。

筆者は大学院の授業でも BYU-BNC を大いに利用しているが、以前より、著作権との関係が気になっていた。実際、BYU-BNC を紹介した教授の研究発表の後には、同じような趣旨の質問が何件かあったが、教授は「限られた数行を表示するのが違法ならば Google 検索も違法になってしまうだろう」と回答され、なるほどと納得した次第である。また、続けて検索をすると自動でストップがかかるようにしているのは、機械的に反復アクセスしてデータの全体を盗み出すような悪質なアクセスを防止するためであるという説明があった。

この学会に合わせて、CORPUS BYU EDU(<http://corpus.byu.edu/>) のサイトには、BNC、Time Magazine コーパスに加え、現時点ではフリーでアクセスできる最大の米語コーパス(3億6千万語)である BYU Corpus of American English が全面公開された。直観的な操作で大規模コーパスからさまざまな情報を取り出せる

BYU コーパスへの参加者の関心は高く、教授の発表を直接に聞く機会が得られたことは、筆者にとって、学会の最大の収穫であった。また、一般の研究発表の中にも、ドイツの Ilka Mindt 氏など、BYU Corpus を駆使した研究もいくつかあり、BYU コーパスが、近い将来、コーパス研究の新しい共通基盤になることが予感できる学会であった。

基調講演と主な発表

今大会の基調講演は下記の 6 本である。

Tony McEnergy: Corpus Linguistics and the Humanities

Laurel Brinton: Historical Pragmatics and Corpus Linguistics: Problems and Strategies

Susan Hunston: "You can't deny the fact that...": An Application of Corpus Linguistics

Harald Baayen: Co-occurrence below and above the word level: exploring language at the intersection of corpus linguistics, psycholinguistics and statistics

Doug Biber: Merging corpus linguistic and discourse analytic research goals: Discourse units in biology research articles

このうち、Hunston 教授の講演は具体例も豊富で説得力に富み、とくに興味深いものであった。

一般発表のセッションでは、William H. Fletcher 氏(ウェブコーパス)、Paul Baker 氏(ジャーナリズムにおけるイスラムの表象)、Tony Berber Sardinha 氏(コーパスからのメタファ自動抽出)、Randi Reppen 氏(大学教材における must の用法)などの発表が印象に残った。日本からの参加者は少なかったが、Yukio Tono 氏が学習者コーパスのタグ付けシステムについて、Shozo Yokoyama 氏が医学コーパスにおける lexical bundle について、筆者は学習者の語彙知識と作文における語彙使用の統計的関係性についてそれぞれ発表した。

また、Laurence Anthony 氏が AntConc のワークショップを行った。会期中、(件のバス車内での強制雑談の場で)中国とイタリアの研究者と長く話す機会があったが、両者ともコーパスの授業では AntConc を使用しており、同ソフトが

今後のコーパス研究の標準ツールの 1 つになるだろうと指摘していた。この点については筆者もまったく同感である。

発表を聴講して：IDIC？

今回の大会の最大の特徴は、言語処理・コーパス構築・言語統計・語法・文法・言語変化・文学解釈・言語教育など、発表のテーマが実に多岐にわたるということである。また、英語だけでなく、スペイン語など他言語の観点からの研究も多かった。こうした多様な研究発表を聴講して改めて感じたことは、かねてより広く指摘されていることではあるが、コーパスの「学際性」が持つ強みと弱みである。広範な分野の研究者がコーパスを接点として一堂に会したことは、それ自体、大きな研究上の可能性を感じさせるが、一方で、参加者のバックグラウンドには重なりが薄く、個々の発表会場での質疑などがなかなか思ったように深まらないという面もあった。

「無限協調における無限多様性」(Infinite Diversity in Infinite Combinations : IDIC)を唱えたのは、米国の SF ドラマ「スタートレック」に出てくるミスター・スポックであったが、果たして、コーパス研究の多様性はいかにして結合と協調に昇華させてゆくことができるのであろうか？アスピングローブの雪はもうすっかり溶けたころであろうが、筆者が雪山から持ち帰った宿題はなかなか解けそうにはない。

英語コーパス学会 Newsletter No. 62

Sept. 1, 2008

■会長: 赤野 一郎
■事務局: 〒175-8571 東京都板橋区高島平 1-9-1 大東文化大学 山崎俊次研究室内
■TEL: 03-5399-7372 ■郵便振替口座: 00940-5-250586 (英語コーパス学会)
■URL: <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html> ■E-mail: yamazaki@ic.daito.ac.jp

JAECS
Japan Association for English Corpus Studies

第 32 回大会のご案内

英語コーパス学会第 32 回大会は、10 月 4 日 (土)、東京外国語大学府中キャンパス (〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 <http://www.tufs.ac.jp>) で開催されます。会場となる東京外国語大学府中キャンパスは JR 新宿駅から中央線 (快速) で武蔵境駅下車、西武多摩川線に乗り換え 2 駅目の多磨駅下車 (徒歩 5 分) というルートが最も便利です (所要時間約 40 分)。京王線の飛田給駅 (北口) から京王バスを利用する方法もありますが、多少時間がかかるようです。事前に経路と時刻を充分ご確認ください。宿泊を必要とされる方は早めの予約が肝要かと思われます。なお会場校の責任者である投野由紀夫先生には準備段階からご尽力いただき深く感謝致します。

詳細は、同封の「大会資料」をご覧くださいのですが、恒例になりました午前中のワークショップのほか、午後には研究発表 6 件とシンポジウムがあります。

午前中のワークショップでは、*AntConc* の作成者である Dr. Laurence Anthony (早稲田大学) が、新しく開発した *AntWordProfiler* の紹介も同時に行いながら “From Language Analysis to Language Simplification with *AntConc* and *AntWordProfiler*” という題で検索方法と、分析結果をどのように ESP の学習環境で応用できるかを講義されます。

研究発表については、運営委員の査読を経て準備委員会で最終的な審査を行った結果、次の 6 件の発表が決まりました。三木望氏 (大阪大学大学院生) の「英国高級紙社説における人称代名詞 Involvement と detachment」、杉森直樹氏

(立命館大学) の「句動詞における動詞と不変化詞の結合特性について 対応分析を用いた考察」、家口美智子氏 (摂南大学) の「現代英語における there+be の文法化について 歴史的発展の視点から」、小島ますみ氏 (名古屋大学大学院生) の「日本人英語学習者の形容詞強意表現 NICE の習熟度別データの分析から」、阪上辰也氏 (名古屋大学)、古泉隆氏 (名古屋大学大学院生)、小島ますみ氏 (名古屋大学大学院生)、杉浦正利氏 (名古屋大学) の「品詞連鎖に着目した日本人英語学習者の中間言語の特徴分析 学習者コーパス NICE を用いて」、白土淳子氏 (北海道大学大学院生)、園田勝英氏 (北海道大学) の「LDOCE3 における語用論的定義 - 特に談話標識に注目して」で、2 室に分かれての研究発表となります。

シンポジウムは、石川有香氏 (名古屋工業大学) の司会の下、今まで比較的研究発表やシンポジウムで扱われてこなかった English for Specific Purposes (ESP) の分野に焦点を当てて「ESP におけるコーパス活用の意義と課題」のテーマで行われます。本シンポジウムは 2 部構成になっており、第 1 部では野口ジュディ津多江氏 (武庫川女子大学) が「ESP におけるコーパスの意義 PERC コーパスを例に」という題で発表されます。第 2 部では「ESP コーパスを利用した英語教育 様々な試み」と題して、石川有香氏が「論文読解・論文作成のための ESP コーパスの利用」、野口ジュディ津多江氏が「コーパスとしての Web resources の利用」、国吉ニルソン氏 (早稲田大学) が「口頭発表のためのバイリンガル・コーパスの利用」の題で、それぞれ発表されます。

2009 年度の大会日程と開催校

第 33 回大会 4 月 25 日(土)神戸大学

第 34 回大会 10 月青山学院大学(日程未定)

以上のように、今回は自作検索ソフトを使って検索を実習し、出た結果をいかに ESP の学習環境で活用できるかといったワークショップ、それに語用論、文法化、中間言語、学習者コーパス等といった 6 件の研究発表、さらにワークショップと連動し、ESP におけるコーパス利用をテーマとしたシンポジウムと盛りだくさんの内容となっておりますので、多数のご参加を期待しております。

午前中のワークショップに参加希望の方は郵便・電子メール(件名「ワークショップ申込」)で、所属と会員・非会員の別を明記の上、事務局までお申し込みください。英語コーパス学会の会員であれば参加費は無料です(非会員の場合は当日会費 1,000 円)。

会誌『英語コーパス研究』第 16 号について

前回のニューズレター(NL61)でお知らせしましたとおり、次回刊行『英語コーパス研究』第 16 号の投稿を 9 月 30 日締め切りで受け付けております。たくさんの応募をお待ちしております。

【原稿提出締切】2008 年 9 月 30 日(火)

ハードコピー 4 部およびフロッピーディスクを提出。論文・研究ノートの冒頭には題名のみ記し、氏名(ふりがな)、所属・職名、住所、電話番号、電子メールのアドレスを明記した別紙(1 部)を添付のこと。

【問い合わせ先・原稿提出先】

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水 3-25-40

日本大学文理学部 英文学科 塚本 聡

TEL: 03-5317-9709 FAX: 03-5317-9336

Email: tukamoto@chs.nihon-u.ac.jp

書式など詳細については、ホームページをご覧ください。

なお、同封の『英語コーパス研究』第 15 号において、最終印刷工程で編集ミスがあり、1 カ所訂正があります。訂正表が同封されていますことを予めご了解下さい。このようなミスの発生したことをお詫び致します。

『英語コーパス研究』編集委員長 塚本 聡

新入会員紹介(8 月 20 日現在、S は学生)

岡田 晃 大東文化大学大学院 S

勝藤 和子 阿南工業高等専門学校

小島 ますみ 名古屋大学大学院 S

諏訪 純代 名古屋大学大学院 S

中山 裕木子 京都外国語大学大学院 S

事務局から

会費納入のお願い

2008 年度会費(一般 5,000 円、学生 3,000 円)を未納の方は、日本郵便にある払込取扱票をしいお納めいただきますよう、ご協力をお願いいたします。なお日本郵便発行の受領証をもって領収書に代えさせていただきますので、ご了承ください。領収書が必要な方は、80 円切手を同封の上、石川保茂(〒615-8558 京都市右京区西院笠目町 6 京都外国語大学)までお申し出ください。払込取扱票の通信欄によるお申し出はご遠慮ください。

過年度会費未納の方は、2008 年度分と併せてお納めください。なお、会誌『英語コーパス研究』第 15 号は 2007 年度の会費を納入していただいた方にのみ、送付いたしております。また、2 年続けて会費未納の場合、*Newsletter* などの送付を中止させていただきます。

住所、所属などに変更や異動のある方は、必ず払込取扱票の通信欄にお書き添えください。

FORUM

新刊紹介

井上 永幸(徳島大学)

inoue@ias.tokushima-u.ac.jp

『英語コーパスと言語教育』

石川慎一郎著

A5判 280頁

2,600円 + 税

ISBN

978-4-469-21321-8



英語コーパス学会の会員で、多方面で精力的に活躍されている石川慎一郎氏(神戸大学)が、大修館書店より『英語コーパスと言語教育』と題する著書を刊行された。紙数に限りはあるが、簡単に紹介してみたい。

本書には「データとしてのテキスト」という副題がつけられているが、これは「著名な文学作品であれ個人の走り書きであれ、あるいは書き言葉であれ話し言葉であれ、さらには母語話者の言葉であれ非母語話者の言葉であれ、従来は異なる分野で扱われてきた言語の諸相はひとしくコーパスの中に取り込まれ、匿名のテキスト・データとして一律の処理にかけられる。われわれは、コーパスを通して、個々のテキストの来歴を捨象し、言語をデータとして観察することができるようになるのである。」(p.iii)という、「コーパス言語学のすぐれた学際性」への著者の強い思いが込められている。英文学、辞書学、語彙分析、英語教育など、幅広い射程での学問的背景をお持ちの著者ならではの視点である。

さて、本書は2部に分かれており、「コーパス研究入門」と題された第1部は3章から成る。第1章は、「コーパスとはなにか」という

表題の下、第1節「コーパスの諸相」ではコーパスの概論的内容が導入され、第2節「Brown Corpus ファミリー」、第3節「British National Corpus」、第4節「Bank of English」といった主なコーパスの紹介へと続く。ただ、単なる表面的な紹介だけでなく、それぞれのコーパスの持つ意味、具体的にそれぞれのコーパスの特長を生かした活用例なども示され、読者を飽きさせることはない。

第II章は「コーパス研究の技術」と題し、第1節「コーパス研究の準備」、第2節「コーパス研究の流れ」、第3節「コーパス研究の視座」に分けて、読者が実際にいるいろいろな種類のコーパスを構築し、各種ツールを使用しながら各自の研究で活用してゆく手法が、具体例とともに示されている。

第III章は「コーパスと言語の計量」という表題の下、第1節「語数の計量」、第2節「頻度差の計量」、第3節「特徴度の計量」、第4節「共起強度の計量」といった言語計量手法が扱われている。文系研究者にとっては統計的手法を用いた分析方法はしばしば高いハードルとなるが、主要な分析方法をこれほど詳細かつ分かりやすく解説したものはなかったであろう。

本書が真骨頂を發揮するのは第2部であろう。「コーパスと言語教育」と題する第2部は3章から成り、第1部で概説したコーパス言語学の方法論を、言語研究、教材研究、学習者分析などの分野でいかに活用してゆかが論じられている。

第IV章は「コーパスと言語研究」と題し、第1節「研究の背景と視点」では言語研究とコーパス言語学の関わりが紹介され、第2節「関係代名詞 which の用法」と第3節「類義語の語法」では、それぞれ関係代名詞 which の制限用法とシノニム関係にある sorrow / grief / sadness について具体的な研究例が分かりやすく紹介されている。

第V章「コーパスと教材研究」では、第1節「研究の背景と視点」で、教材分析・開発や辞書・語彙表開発におけるコーパスの役割が論じ

られている。第2節「英語教科書の分析」で、高校英語教科書をコーパス化したものと英語コーパスを比較しながら、日本の英語教科書の問題点が指摘されている。第3節「児童用語彙表の開発」では、小学校高学年で必修化が予定されている英語活動を念頭に、語彙表の作成を試みている。

第VI章「コーパスと学習者研究」では、第1節「研究の背景と視点」で、学習者コーパスと学習者分析の現状を紹介し、第2節「書き言葉の産出」では、日本人英語学習者の語彙知識と語彙産出の関係、及び産出語彙の特性を論じ、第3節「話し言葉の産出」では、発話語数、高頻度語使用率、特定人称代名詞使用率、過剰使用語と過少使用語などを題材に、日本人英語学習者の話し言葉産出における中間言語分析を試みている。

巻末には参考文献のほか、事項索引、分析事例語句索引が用意されている。学生はもちろん、英語を始めとする語学教育に携わる者、研究者に最新の有用な情報を提供してくれており、進歩の速いコーパス言語学を言語教育の立場から概観する好著である。